

美しい南の島の危機

サモア（独立国）というと、椰子の茂る南海の孤島というイメージだろうか。美しい夕日と白い砂浜、伝統的な絆で結ばれてゆったりと暮らす人々……。そんな穏やかな島に災害は予告なしでやってきた。現地時間の2009年9月29日午前6時48分、サモア南方沖トンガ海溝で発生した地震により、サモアは南東海岸を中心に大規模な津波被害を受けた。

津波が押し寄せた当時の衝撃的な体験を、現地の看護師長が語った。「海の向こうからすごい勢いで波が迫ってきた。大声で皆に知らせ、逃げようとしたけど、気がついたときにはもう泥水の洗濯機に投げ込まれたような勢いで流されていた……」。

一瞬にして、大波はサモアの中でも最も美しい観光リゾート地を含め、島のほぼ南半分にあたる人々の暮らしを飲み込んでしまった。最終的に140名余の命が奪われ約5,000名が住居を失ったという。しかし、親族の絆が固く、大家族のサモアのこと、実際に身内を亡くし悲しむ人々は予想以上に多いと思われる。

モノクロ映画のような世界

被災から約1か月後、筆者を含む2名は大学間協定のあるサモア国立大学を通じて、被災地への看護支援と義捐金の手渡しを行うため、現地を訪れた。首都から1時間ほど車に乗り小高い山を越え、いよいよ目前に海が迫ったとき、ハイビスカスやブーゲンビリアのあふれる極彩色の世界がいきなり途切れた。どこが被災地なのか説明は不要だった。まるで映画のフィルムが突然切り取られたように、グレー以外の色はすべて失われた。立ち枯れた木々、砂をかぶった瓦礫の山々、あちこちに立つ手作りの十字架。廃墟となった村々は……。人々は……。どこへ行ってしまったのか？被災から1ヶ月が過ぎ、何もなかったかのようににぎわう首都とは裏腹に、その壊滅的な姿に呆然とするばかりだった。

被災地の病院で行われる看護

被災地の地方病院には医師は常駐しておらず、看護師はここサモアでも朝早くから、日が落ちるまで大忙しだ。早朝からやってくる来診者の対応と簡易な検査や薬品の処方、妊産婦検診、予防接種……。怪我の縫合も壊疽部分の切除も、看護師の判断で次々に行われた。

意外なことだが、津波の被災者らしい患者はここにもいない。看護師長によれば、病院はすでに津波前の状態に戻りつつあるという。しかし、津波直後は、今立っているこの廊下にまで、多くの遺体が運び込まれ、院内には近隣諸国のボランティア看護師があふれたという。気がついてみれば、病院の診療棟の前の看護師宿舎はコンクリートの基礎部分だけを残し、壊れかけた車椅子やストレッチャーが置き去りにされている。

被災直後の現地で何が行われたのか。そして現在何が起こっているのか。被災後の看護支援をきっかけに訪れたこの地方病院で行われる看護や日本の看護との違いについて、筆者が見たサモアの現状をこれから2回にわたりお伝えする。



かつては風光明媚であったビーチリゾートも無残に壊滅した